



2011年度 札幌地区使徒職大会の開催

世界のみんなきょうだいさ！
Let's Get Together



2011. 10. 2 藤学園講堂
参加者800名



今年度の使徒職大会のテーマは、札幌地区の教会が新しい出会いを求めて、滞日外国人の方々とともにミサをささげ、真に開かれた共同体を目指すものです。札幌地区には多くの外国人信徒の方がいますが、同じカトリック教徒でありながら私たちはあまり関心を持っていないのではないのでしょうか。外国の方とどう関わってよいのかわからなくて消極的になってはいませんか。勝谷地区長は、「日本の教会は閉鎖的だと外国の方から指摘されます。それは日本人の気質や文化に根ざして

いるものですが、私たちは自分の限界を超えて神の招きにこたえていかなければなりません。私たちは神から宣教に招かれていますが、宣教は難しい神学や聖書の言葉を述べるのではなくて、出会いを求めていくことです。私たちは自分の限界を超えて出会いを求めていくように心のあり方を変えなければ、決して教会は発展していきません。今回は出会いの場を設けていただきました。そこで自分を超えて関わりを持つように、そういうチャレンジの場であり、新たな宣教する共同体となるように召されていくひとつの気づきとなるように、今日は多くの出会いを得ていただきたい。」と挨拶し、マイレット神父が英語に通訳しました。

はじめに菊地司教が山形県新庄市での滞日外国人の方々の熱意による信仰共同体と教会の誕生と、そこから見いだされる新しい福音宣教のあり方について講話しました。ミサは、国際ミサとして聖歌、聖書朗読、説教、共同祈願がアジア、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカ各国の言葉でも唱えられ、奉納はアフリカの音楽を流して花や収穫物も捧げられました。当番の北1条教会と英語ミサグループの方々が一生懸命準備してくださり、わたしたちはひとつの家族なのだと実感しました。

ミサ後は自由参加の交流会がありました。持参の昼食を摂りながらの国際交流でしたが、予想を超え200名ほどが参加して大盛況でした。SPに守られたVIPが登場するサプライズもあり、互いに歌を披露し、楽しく交流しました。滞日外国人の方といっても、アメリカ、フィリピン、ブラジル、韓国というなじみの国ばかりでなく、ポーランド、リトアニア、タンザニア、ザンビア、コロンビア、チリと札幌は大都市ですので多くの国から来られています。その方々とは信仰によって結ばれており、まさに「世界のみんなきょうだいさ！」です。この大会が札幌地区の新しい一歩となるよう心から願っています。

○菊地司教講話



山形県の新庄市に昨年教会が誕生しました。

新庄市には、それまで建物としての教会はありませんでしたが、100名ほどの信徒の共同体がありました。日本人信徒は2名で残りはフィリピンから嫁いできた女性とその子供たちです。わが国では1970年代後半から農村の嫁不足が深刻な社会問題となっていました。山形県は行政が主導して海外から花嫁を招き入れる政策をとり、フィリピンから多くの女性が農村花嫁として来日しました。彼女たちは初めての地で、異なる文化と生活習慣、農家の嫁として、母として、大変な苦労をされてきました。そのような境遇にありながら、彼女たちの信仰の熱意が信仰共同体を生み出し、そして教会の誕生につながります。この共同体のリーダーの一人である女性は、見知らぬ地で苦勞しながらも教会が近くにないことが気になっていました。彼女はシスターになりたかったのですが、病気のためあきらめざるを得ませんでした。両親に「シスターにならなくても教会のために働ける」と諭され、日本にきても教会のために働くという思いは持っていました。教会は車で2時間もかかる鶴岡市にあり、夫に頼んで年に何度かは教会に連れて行ってもらいました。農作業や家事や育児で疲労困憊していながら休みの日に教会に行く姿をみて周りの人から「あなたは教会に行かなければ生きていけないのですか。」と訊かれました。そう問われて、彼女は神様と自分の不思議な関係を思い巡らすことができ、なお一層、自分が与えられた場で教会に貢献したいという思いが強くなりました。その強い思いが、ほかの多くの同じ境遇にある人たちの思いと重なって、自身も想像できなかったスピードで全てのことが進んでいきました。鶴岡や山形の神父さんと協力して公共施設やホテルでミサをするようになり、最初は参加者も少なかったのですが、スーパーで出会ったフィリピン女性に声をかけ続けました。その結果が新庄における信徒の共同体の誕生となりました。私は2004年頃からこの共同体にかかわるようになり、信徒の皆さんが教会を建設したいという夢を語ってくれました。その当時は、それこそ夢物語だと私は思っていました。しかし信徒の方々の熱意に押される形で建設計画を進めることに同意し、2009年には新庄に教会を建てる宣言しました。次年度が新潟教区100周年になるので、これまでの福音宣教を振り返り、将来を考える契機としたい。これからの福音宣教を考える上で、新庄に現れた外国人信徒を中心とした共同体の存在は大きな意味があると感じ、教区全体で支えて新庄に教会を建設しようと、年頭司教書簡で呼びかけました。とはいえ、教会を建てるのは簡単ではありません。共同体の熱意はすごいがお金がありません。今から募金をはじめても10年はかかるだろうと思っていました。しかし、多くの方が賛同して多くの献金が集まり、加えて、教会に転用可能な旧幼稚園が手頃な価格で売りに出されて、まさに神様の「時」が用意されたように、



開会挨拶は地区長とマイレット神父



奉納は大地の恵みも

翌年に献堂式を迎えました。

新庄教会を生み出していった信徒の熱心さは我々にひとつの示唆を与えてくれます。彼女たちが懸命に教会を求める姿が周囲の人たちへのしるしとなりました。まさに、あかしによる福音宣教です。困難な生活の中でも懸命に祈りの場を求める姿が「教会に行かないと生きていけないのですか」という問いかけを生み出すほどに、周囲の人たちに語りかけている、まさしく福音宣教のわざです。私たちが掲げている福音宣教のメッセージは、現代社会に対するしるしとしては、そう簡単に多くの人に受け入れられるものではありません。しかし、私たちは、この福音のメッセージこそが現代社会に必要なものだと確信しています。だからこそ、目に見える成果がすぐに現れなくても挫けることなく福音を告げる証し人とならなくてはなりません。教会共同体の熱意が周囲の人たちから不思議がられるほどまで熱していくように、共同体を育てていかななくてはなりません。

私は、フィリピンの信徒の方々は、まさしく宣教者として神によって日本に派遣されてきたと固く信じています。彼女たちの姿と熱意は新しい福音宣教そのものです。実際、新庄では彼女たちの熱意にほだされて、ご主人たちが次々と洗礼を受けています。ここに日本における、地方の教会の新しい福音宣教の具体的な形があります。滞日外国人の方々だけが宣教者ということではありません。私たちとともに、教会共同体がその姿をもって周りの人たちに熱意を示す。そういう存在に変わっていかなければなりません。

(文責：広報 能町浄彦)



恒例の子どもたちの絵画展



交流会は大盛況



オバマ大統領？登場



英語ミサグループが歌を披露

講演「平和を祈る旅—被爆マリア像をたずさえて」報告

札幌地区カトリック正義と平和委員会
担当司祭 新海 雅典

1、はじめに

今年の札幌地区主催の「平和について学び・考え・祈り・そして行動する40日間」は、プロテスタントや市民団体との共催による「7・7集会」（1937年7月7日・中国侵略のはじまりとなる盧溝橋事件の日）から始まり、7月30日には長崎から高見三明大司教をお招きして、平和講演会でひとつの高揚を見ました。今回高見大司教は『長崎教区の至宝である本物の被爆マリア像』を持参して、札幌の地を訪れて下さいました。この「被爆マリア像」は大正時代にスペインから寄贈され、長らく旧浦上天主堂の中央祭壇に安置されていた木彫の像でしたが、原爆によって教会とともに破壊され、戦後に頭部だけがトラピスト会野口神父によって発見され、保管されていたものです。それが1975年に長崎教区に返還され、現在は浦上教会の「被爆マリア小聖堂」に安置されているものです。

2、高見大司教の平和巡礼

講演で大司教は2010年4月から5月にかけて、この「被爆マリア像とともにヨーロッパと米国を平和行脚した体験を話されました。ローマでは教皇ベネディクト16世と会見し、マリア像への祝福をうけました。次にスペインを訪ね、バルセロナ、ザビエル城、そして1937年に人類初の激しい無差別爆撃を受けたゲルニカの町へ入りました。これは当時のフランコ軍事独裁政権の依頼を受けて、ドイツ軍が大空爆をおこない、無辜の子供や市民約3500人が殺された事件で、有名なピカソの絵画にも描かれています。

さて4月末に単身ニューヨークへ渡った高見大司教は、国連本部で潘基文（パン・ギムン）事務総長はじめ様々な代表者と会見し、被爆マリア像とともに原爆の悲惨さとその罪深さ、そして核廃

絶と平和の尊さについて訴えました。この米国訪問のきっかけとなったのは、この年の6月に開催される「核拡散防止条約（NPT）再検討会議」に向けて、広島教区の三末篤実司教と共同で発表した「被爆地ヒロシマ・ナガサキの司教からの要請～核兵器廃絶に向けて勇気ある一歩を」（2月26日付）という文書でした。米国大統領と各国指導者宛のこの要請文には、「いかに瞬時にかつ大量に人を殺せるか、またいかに兵器生産で利益を上げるかという目的のために、人類の科学技術の進歩が悪用されることは何と悲しく愚かなことでしょうか。この愚かさによって先の世界大戦末期



に、一瞬にしてヒロシマ・ナガサキの十数万人に及ぶ人々の命を奪い、今に至るまで被爆犠牲者を肉体的にも精神的にも苦しめ続けている恐るべき核兵器、それが更に威力を増して全世界で二万発も保有している現実もまた何と愚かな事でしょう。その罪深さの責任は直接原爆を投下した米国のみならず、戦後その米国の核の傘の下で安全保障を得ようとしてきた日本、そして広く歴史を通じて戦争をし続けてきた世界全体にあります。それゆえ核兵器廃絶と戦争のない世界の実現に向けて、勇気ある一歩を踏み出して下さい」と結んでいます。

3、平和の祈りの部

第2部は、北11条教会の富田節子さんによるバッハのオルガン演奏で始まりました。続いて「失われたいのちへの鎮魂歌」として、原爆犠牲者と更に今年の「東日本大震災犠牲者」のために、50本のキャンドルが、フォーレの「レクイエム」の曲が流れる中、厳かに被爆マリア像に捧げられました。後半には若い高校生の代表（小野幌教会の松尾まりあさん）による『平和の誓い』が、力強く朗読されました。そして結びに5つの共同祈



被爆マリア像を背に、核のない平和を訴える
高見三明大司教

願、①東日本大震災犠牲者のために、②原発の被害に苦しむ人々のために、③基地をかかえる沖縄の人々のために、④ヒロシマ・ナガサキの原爆犠牲者のために、⑤平和の元后である聖マリアのとりつぎを願って、が捧げられました。最後に再び高見大司教がアピールのために壇上に

上がり、次のように訴えられました。

私自身も母の胎内で被爆した者であり、あのヒロシマ・ナガサキに落された原爆の破壊のすさまじさと、放射能による人間への被爆の恐しさを身をもって体験した者の一人です。そして今年「東日本大震災」による東京電力の「フクシマ原発事故」は、或る意味では3回目の核爆発を日本は経験したことになります。福島とその周辺の広域にわたる町々は、まさに「放射能すなわち死の灰を浴びた町」となったのです。ヒロシマ・ナガサキの原爆と、フクシマの原発事故とは、この核爆発と放射能汚染という形でつながっている出来事なのです。

北11条教会に集まった530名をこえる参加者（一般市民が4分の1ほど）は、この訴えをしっかりと心にとめ、「被爆マリア像」が発する無言の平和のメッセージと合せて、核廃絶と平和の大切さについて誓いを新たにしました。

平和旬間特集〔2〕

2011年 平和を祈る40日間 「いのちと環境の尊さを学ぶために」

札幌地区・平和旬間実行委員会

日中戦争開始の7月7日（1937年）から終戦の8月15日（1945年）までを、「平和について学び・考え・祈り・そして行動する40日間」として、とりくんできました。今年も上記のテーマで平和講演会、平和祈願ミサ、平和行進などを行いました。

平和講演会 7月30日（土）14：30～17：00
カトリック北11条教会

「平和を祈る旅～被爆マリア像をたずさえて～」

講師 高見三明 長崎教区大司教
（社会司教委員会委員長）

参加者 530名

平和祈願ミサ 8月15日（月）18：00～19：00
カトリック北一条教会

司式 勝谷太治神父（札幌地区長）・司祭団
参加者 190名

勝谷神父は説教で、9・11後の世界平和の日（2002.1.1）でのヨハネ・パウロ2世のメッセージにもとづき、「ゆるすことは勇気が必要です。しか

しこのことが平和への近道なのです。私達一人ひとりの中にある原理主義的傾向、すなわち自らの信ずるものを他の人に強要することは、人間の尊厳をきずつけることになります。」

「国家による報復や暴力的行動（私達のうちにもある）などは、自分達が絶対に正しいと主張することから来ているのではないのでしょうか。絶対主義を主張するだけでは問題は解決しません。」

「正義＝愛によって変えていかなければならないでしょう。自分を変えることによってかわることができるのです。平和をつくるために、私達がかかわることのできるよう祈り求めましょう。」と話されました。

共同祈願では、虹の会、札幌マリア院、働く人の家、正義と平和委員会から祈りがささげられました。

ミサ献金76,378円は、札幌教区サポートセンターを通して「東日本大震災支援」のために贈りました。

平和の折り鶴の奉納先は次のとおりです。

広島平和公園



手稲、花川マリア院、富岡、北見、小野幌、
大麻、江別、北26条
長崎原爆慰霊碑
山鼻、円山、真駒内
沖縄・平和の礎

北一条、北11条、月寒、他3

終りに、札幌キリスト教連合会・信教の自由を守る委員会からのメッセージが読みあげられました。

平和行進 8月15日(月) 19:20~20:05

参加者 70名

ミサ後、教会から大通公園までキャンドル(ペンライト)行進をしました。プラカードをかがけ、憲法9条は世界の宝だ! 沖縄・辺野古に基地をつくるな! 原発をなくそう! などのシュプレヒコールで平和を訴えました。女性、ファミリー、青年、シスター、司祭などがひとつになり元気に行進しました。大通3丁目でプロテスタントの皆さんが待っていてくれましたが、降雨のため、残念ながら、祈りの交流はとりやめました。

今年も、8月6日、9日、15日には多くの教会で「平和の鐘」と祈りのひとときがもたれました。

40日間、多くの皆さんの協力をいただきました。ありがとうございました。

(社会委員会 松井洋治)

シリーズ 人権フォーラム〈第3回〉

「地域住民と被曝労働者の人権」 ～フクシマと泊の現場から～

講師：齊藤 武一さん(岩内原発問題研究会代表)

2011年9月17日(土) 15:00~17:00

聖ベネディクトハウス 参加者30名

主催 カトリック札幌地区社会委員会

プロフィール

(さいとう・たけいち) : 1953年岩内町生れ。元保育士。現在、学習塾経営。市民団体「岩内原発問題研究会」代表。

今回は、自作の「紙芝居」60余枚を用いて、わかりやすく、熱心に話してくれました。以下その要旨を紹介します。

〔故郷の海を守りたい〕

原発はウランからの熱のうち電気になるのは1/3だけで、残り2/3は海へ温排水として捨てています。(周りより+7℃の海水を毎秒150トン出して



いるのです。)それから放射性物質も少しずつ流しています。

岩内はスケソウ漁で栄えた町です。日本一おいしいタラコで有名でした。家の前が海で、一年中魚だらけでしたよ。アワビなど一人で1万個は食べた計算になるかなあ。中学生のころ船は100隻ぐらいだったのに今は4隻。漁師さんも原発作業員へと転職しました。

温排水でスケソウが逃げていったら大変と反対運

動を起こすのですが、だれも水温をはかろうとしません。それなら自分ひとりでもと思い、原発から4キロの防波堤で水温をはかりました。2003年、25年間の記録として、「海の声を聞く」を著しました。25年間で0.9℃上昇、自然増0.6℃として、差0.3℃が温排水によるものです。

故郷を守り、海を守りたいとの思いで続けた水温活動ですが、50年間をめざして観測をするつもりです。

〔原発と子どもたちの未来〕

1945年以来、核実験の死の灰の影響で小児がんは増えつづけ、1970年には6倍となります。核実験をやめても下がらず2000年代になっても6倍を維持しています。私は原発の影響と考えています。

乳がんも、日本は50年間で4.3倍、アメリカは2倍に増えています。原発から100マイル（160キロ）以内で乳がんが増えるという統計があります。（ワールド「内部の敵」）

雨には、微量ながら放射性物質が入っています。そのことで内部被ばくし、乳がんとなります。内部被ばくから10年後に乳がんが増えることは定説となっています。私は雨と乳がん死には関係があることを調べました。雨の多い小樽が北海道で一番死亡率が高いのです。

内部被ばくは、体の中に放射性物質を取り入れるため、体内でじわじわと長期にわたって被ばくします。放射線がごく微量でも、遺伝子が傷つき、免疫細胞などが破壊されるのです。10年後、20年後に発病することになります。傷ついた遺伝子は親から子へと引き継がれていきます。（「ペトカウ効果」、ワールド「死にいたる虚構」）

1986年、チェルノブイリで子どもたちのときに内部被ばくした人が、成長し子どもが生まれます。その子どもたちの中に、脳に障害をもった例が多くあります。傷ついた遺伝子が最も影響するのが脳です。映画「チェルノブイリ・ハート」にも脳に障害をもった子どもたちが登場しています。

アメリカでは原発を止めた後、乳児死亡率が下がったというニュースがあります。子どもたちの未来と原発は直結しているのです。

〔星がかがやく未来へ〕

泊原発ができるまでの経過を話された後、泊の様子として……。

泊原発の地元は4か町村といます。神恵内村では今人口が千人まで落ちてきて、高齢化が進み村の



存亡が危ぶまれています。泊村は、人口1,900人が減りはじめています。予算が50億円で、世界一豊かな村でしょう。しかし、原発からの固定資産税はあと10年もしたらゼロになります。4号機や原発のゴミの処理場建設を申し出たが、やんわりと断られました。

共和町は、雷電スイカ、メロンの産地ですが、風評被害を心配しています。岩内町、人口が1,500人を割り、基幹産業の漁業はほぼ全滅です。200億円の借金があるが、国が何とか助けてくれています。岩内を赤字団体にするわけにはいかないからです。

作業員の被ばくに関しては、隠されているので報道されないこと多いのですが、私の知り得たものとして、89年50代の方が二人死亡。94年、2号機の一次系パイプがはずれ、一人被ばく。2000年、低レベルの液体が入っていたタンクを掃除中、二人被ばくし一人は死亡。救急車で岩内の病院にはこぼれたのですがパンツから放射線がみつき被ばく事故が判明しました。09年にも配管のひび割れの応急処置中に、一人がかなりの放射能でやられたという話を耳にしています。

泊1・2号機は運転から20年が過ぎ、老朽化が始まっています。統計では20年を過ぎると事故が多発します。3号機はプルサーマルを導入しようとしています。プルトニウムはコントロールが難しく、放射線レベルが高く、事故の際、被害が拡大します。プルサーマルからのゴミはプールを作って、500年間冷やし続けなければならないそうです。

フクシマ3号機（プルサーマル）では核爆発がうたがわれています。チェルノブイリ事故では、広島500発分の放射性物質が出たといわれていますが、その1/10としても50発分になります。

原発があるかぎり、未来はありません。いかなる理由をつけても原発はダメです。

講演のあと、30分ほど質問を受けましたが、斉藤さんは、ていねいに応えてくれました。

（社会委員会 松井洋治）

中央ブロック南地区教会学校合同夏季学校を実施

—困難の中に合っても 希望を失わずに 毎日の生活をしているたくさんのきょうだいに心を寄せて—
7月31日（日）～8月2日（火）

少子高齢化が進む日本社会ですが、カトリック教会でも同様な現象であることはどなたも認めるところです。子どもがいない、来ないで教会学校が成立しない教会もありますし、サマーキャンプも参加者やスタッフ不足のために実施できないところもあります。教会の将来を担う子どもたちに学校や家庭では得られない友との出会い、支え合う喜びや大切さを知るチャンスを提供することは、過去からあったように先を歩む私たちの使命であることには違いません。

札幌地区が新しいブロック体制による活動に移行して2年目になりますが、他のブロックにもあるように今年の5月から中央ブロック南地区にある円山



・真駒内・山鼻3教会は、1人の主任司祭が兼務するようになりました。これを契機に教会学校は、子どもたちの交流を積極的に努め

ようと話し合い、6月には山鼻教会で最初の交流会を行いました。また短い準備期間ではありましたが7月31日から8月2日までの日程で美瑛町白金にある「国立大雪青少年交流の家（交流の家）」の確保ができたので、32名の子どもたちと10名のリーダーによる合同夏季学校を実施いたしました。

グループは、教会や学年の枠を超えた編成とし、交流の家をベースに自然との触れ合いの機会をたくさん持ってもらうこと、活動を通して隣人との協力や思いやる心を育て合うことができるように生活の目標を置きました。特に、東日本大震災直後である今、私たちが被災者に寄り添い考える時間を持つことを日課に加えました。

震災支援ボランティアで直接出会った話しや世界を駆けめぐるインターネットで知る被災地からの声、世界中から寄せられる励ましのメッセージや祈



り、画像が紹介され、深く心にしみ入る時を過ごしました。そして、虹の架け橋と緑の丘の間に励ましメッセージを紡いだポスター

を制作しました。さらに3教会をリレーし、参加できなかった友達もことばを書き添え札幌教区の宮古ベースを通じて仙台教区に送りました。

新鮮な地元の自然食材で作られバイキング方式で提供された食事は、食物アレルギーへの気遣いもなく安全・安心なものでした。何よりも子どものペースに食事の一時を委ねましたのでテーブルごとに会話が弾み、グループごとの交流を深める絶好な時でした。

自然との触れ合いは、ふれあい牧場や四季彩の



丘、望岳台などを巡り、山羊や羊、ポニーに触れ合い引き馬乗馬を楽しむとともに、野草や美しい草花や自然の大パノラマを堪能し

ました。

行けないリーダーは準備段階で応援してくれ各々が知恵と力を出し合った新しい試みは、十分整えられた環境で無事に終了しました。経費も3教会分担の支えがあり、何よりも中高生が小学生を支えてくれたことはスタッフの助けとなりました。9月18日には真駒内教会で交流会を行い、また、来年の夏季学校の準備も始めました。

（文責：山鼻 高田克彦）